


 いわき市立総合磐城共立病院

# 地域医療連携室だより

## 「磐城共立高等看護学院の生い立ちと存在の意義について」

磐城共立高等看護学院長 渡邊 信雄



磐城共立高等看護学院は、看護師不足と発展、高度化する地域医療へ対応するために、昭和43年4月15日に磐城共立病院内の一部を校舎として開校し、平成20年3月までに1,448名の卒業生を医療界に送り出してきました。私は平成12年4月から、何らの内示も無く突然小児科主任部長との兼務で副学院長に任命され、平成17年10月から高橋弘前学院長の定年前の退職により後任に就任しました。また、後任の副学院長にはやはり兼務で外科の阿部道夫先生に就任していただき、今日に至っています。

開設から40年の不惑を迎えた本校の生い立ちについては院外のみならず、院内でも知らない方も多いと思ひ、その歴史と現状について述べさせていただきます。

設立の母体となった磐城共立病院は昭和25年11月1日、市町村組合立として、畠山靖夫院長はじめ医師5名、ほとんどが准看護師の看護師14名など総職員数33名、病床数50床で内科、外科、産婦人科の3科で開設されました。開院10年目の昭和35年には病床数730床、医師21名、看護師77名の構成と大きく成長し、昭和37年に総合病院に認可されました。昭和41年10月1日、いわき市制に伴いいわき市立に移行しました。そのときの病床数は783床、医師数32名、看護師数107名でほとんどが准看護師であり、看護師不足のために基準看護も取得できない状況でした。当時の看護師不足は全国的であり、浜通りには看護師養成所も在りませんでした。医療の進歩に合わせた病院の近代化のために本館新築が計画された際に、初代畠山院長は自らの手で看護師養成を決断され、本館の中に看護学院として必要な教室、講堂、実習室等を設置し、開校の準備に着手しました。しかし、教員としての人材は病院内のみならず、福島県内にも無く、東北大学医学部同級かつ秋田県の同郷の秋田県立中央病院長兼秋田県立高等看護学院長を



【いわき市立総合磐城共立病院 地域医療連携室】

電話 0246(26)2250(直通) FAX 0246(26)2119  
 URL <http://www.iwaki-kyoritsu.iwaki.fukushima.jp>  
 E-mail [kyoritsu@iwaki-kyoritsu.iwaki.fukushima.jp](mailto:kyoritsu@iwaki-kyoritsu.iwaki.fukushima.jp)

されていた前多豊吉先生に要請し、教務主任はじめ数名の教員を割愛していただき開設の目途が立てられました。臨床実習病院としては、共立病院がまだ基準看護を取れていなかったために、基本実習病院は福島労災病院（院長はやはり東北大学医学部同級の長嶋幸一郎先生）、小児科と結核のみは共立病院、精神科は長橋病院、産科は磐城中央病院に依頼することで昭和43年3月21日に看護師養成所として厚生省から指定され、同年4月15日に開校式とともに第1期生41名の入学式が挙行されました。開校当時の1学年の定員は38名でした。また、一般教養基礎科目の講師としては、福島工業高等専門学校、磐城高校、平保健所、福祉事務所、少年鑑別所、福島大学、長橋病院の協力により確保されました。このように、本校は地域の多方面のご協力で開設されましたが、現在も上記の他に明星大学、老健施設、福島整肢療護園、保育所など地域の多くの施設のご協力で運営されており、感謝申し上げます。昭和45年には校歌、校章が制定されました。

入学生のほとんどは共立病院の委託生で、通学困難な学生のために現在の東二病棟の4階に学生寮があり、舎監が委嘱されていました。外来棟の屋上にはネットに囲まれたバレーコートがあり、体育の授業は屋上が運動場でした。私は昭和45年に共立病院に入職し、院内の2階建ての官舎に新婚で入居しましたが、向かいの学生寮から監視され、体育の授業では外来診療中の天井から響いた大きな振動が今は懐かしく思い出されます。3年間の総授業時間は3,722時間と長く、看護師に大切な一般教養科目に多くの時間が割かれていたのは本校の特徴でした。卒業生の大部分が共立病院に就職し、病院の看護体制の充実に大きく貢献し、精神科以外の実



習も共立病院で可能となりましたが、地域の他医療機関の充足には至らず、昭和55年度の入学生から行政上の判断により市内の医療機関にも一部開放されることになり、やがて全定数が開放され今日に至っています。より良い教育環境の確保のために、昭和59年に現在地に新築移転し、翌年には体育館も併設されました。同時に、電算化の将来を見越して学生が1台ずつ使用できる端末を設置した情報教育

を導入したことは学院の大きな特長として挙げられます。平成8年1月に医療専門3年課程、看護学科の専修学校に認可され、入学定員40名、総定員120名で運営されています。

私が学院の運営に携わってから、いくつかの課題に直面してきました。まず、学院は共立病院が開設し、実習、講師派遣のほとんどを共立病院が担っているものの、いわき市の補助金で運営されているためか市の機構では半ば独立した存在でした。平成19年に病院が公営企業法の全部適用となり、学院は共立病院の一部局に組み込まれ組織的に明確化されました。次に、共立病院の看護師採用は市当局が行っており、病院からの要請に反して看護師の採用を数名程度までに極端に減少させる施策が執られました。その結果、いわき市が育てた卒業生は市外や県外に就職せざるを得ない状況となり、市立の存在意義に疑問が寄せられました。この点も全部

適用により改善されつつあります。また、教員は14名配置されていますが、全員が病院と同じ看護職で、専任の教員となって長期間教員を続けています。教員には夜勤は無く、多くの研修も受けられるなど看護師に比して利点がある反面、長期になると日進月歩の臨床には疎くなる不利もあります。教員になるには5年間以上の臨床経験と指定された研修の受講が必要とされています。病人を心身ともに看護する看護師と若い高校卒の看護学生を医学的のみならず人間的にも教育する教員には業務内容に質的な差異も大きく、経験も必要とされます。臨床看護と教育のバランスを図りながら、学院運営の将来のために計画的な教員養成と病院と学院の人事交流を行うことが必要です。また、最近の共立病院の医師不足は専門科目の講師不足を来しており、院外講師の依頼もせざるを得なくなり、今後の学院運営の大きな問題点となると思われます。地域の先生方にはご協力をお願い申し上げます。



臨床看護と教育のバランスを図りながら、学院運営の将来のために計画的な教員養成と病院と学院の人事交流を行うことが必要です。また、最近の共立病院の医師不足は専門科目の講師不足を来しており、院外講師の依頼もせざるを得なくなり、今後の学院運営の大きな問題点となると思われます。地域の先生方にはご協力をお願い申し上げます。

少子化の影響と高等教育の多様化で、今後は入学志願者の減少と地域の看護師供給力が低下することが危惧されています。そのために、平成20年度から40名の定員のうち10名は市内の高校からの推薦入学制を導入しました。入学生の8割をいわき市出身者が占める結果となり、推薦入学制の効果が見られています。これには、平成19年度からの市立病院の看護師採用枠の大きな拡大も影響していると思われます。市の看護師採用に関しては、一部の医療機関の現役看護師が採用試験を受験して採用され、引き抜きとの強い批判が浴びせられています。志願者には総合病院での勤務や専門医療への志望や待遇などさまざまな要因があると思います。逆に共立病院の退職者の多くも市内の医療機関に移動、再就職している事実もあります。このような軋轢は、これまでの看護師不足が大きな原因と考えられ、学院の地元出身学生の増加は今後の地域の看護体制の充実に明るい将来をもたらすものと期待しています。

最後に、磐城共立高等看護学院は地域の多くの皆様のご努力によって地域のために開設され、現在も多くのご支援により運営されています。地域の看護体制の充実発展のために、今後ともにご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(学院の歴史に関しては「磐城共立高等看護学院史」を参考にさせていただいたことを付記します。)





## 心療内科

心療内科

岩橋成寿

### 【沿革】

昭和46年に、当時の宇留賀一夫内科部長（元当院院長 [昭和63年～平成6年]）が、心身症外来を開始したことが、当院心療内科の嚆矢です。その頃、内科のスタッフ数が増加して、消化器、循環器、糖尿病、血液等の専門分野別にグループ化されて診療レベルが向上しましたが、一方で、各分野の範囲に入らない患者、特に心身症圏の患者の行き場がない状況が出現していました。宇留賀部長は、友人である鈴木仁一講師（当時東北大学長町分院内科で心身医学を専攻、元東北大学心療内科科長）に応援医師の派遣を依頼し、昭和48年から心身症の専門外来が発足しました。尚、昭和46年から、1名の臨床心理士が常勤し、心理検査とカウンセリングを担当しています。

当院で初期研修を終了した松崎博光医師（現ストレスクリニック院長、いわき市医師会副会長）が、昭和56年4月に心療内科専任医師として採用され、心療内科の常勤医体制が整いました。平成5年に松崎医師が開業した後は、東北大学心療内科から、太田亮一医師（平成5年3月～6月）と村中一文医師（平成5年7月～平成6年7月）が派遣されて常勤しました。その後は常勤医が不在となり、週3回の外来を東北大学心療内科からの応援医師が交代で担当していましたが、平成8年5月に筆者が着任し、常勤医体制に復しました。

### 【スタッフ】

心療内科のスタッフ数は、常勤体制発足以来、医師1名、臨床心理士1名、外来看護師1名（午前のみ）の3名です。

筆者は、日本心身医学会（心身医療内科専門医、日本心身医学会研修指導医）、日本内科学会（認定内科医、総合内科専門医）、日本総合病院精神医学会、日本うつ病学会、日本温泉気候物理医学会、日本絶食療法学会、に所属しています。

國井啓子臨床心理士は、日本心理臨床学会、日本児童青年精神医学会、日本心身医学会、日本交流分析学会、日本家族心理学会、箱庭療法学会に所属し、IQ検査、発達検査、失語症検査、人格検査などの各種心理検査と、自律訓練法、小児の箱庭療法とカウンセリングを担当しています。

### 【診療状況】

午前中には、外来診療を予約制で行い、午後には、他科からの診療依頼に応じるコンサルテーション・リエゾン活動を行っています。スタッフ不足のため、原則的には心療内科としての

入院治療は行いませんが、神経性無食欲症で身体状態が極度に悪化した場合などに限っては入院治療を行っています。

外来診療は、主に身体疾患のため当院に通院中の患者の精神症状の治療を行います。院外からも、心身症圏の紹介患者を受け付けています。しかしながら、幻覚・妄想があったり、病識のない、統合失調症や躁病の患者については、筆者には診療経験がないため、市内の精神科病院やクリニックに紹介しています。

午後に行うコンサルテーション・リエゾンの主要な役割は、平成19年に結成された緩和ケアチームのメンバーとして、入院中のがん患者の精神的ケアを行うことです。その他に、薬物や一酸化中毒等の方法で自殺企図を行って救命科に入院した患者の精神状態の評価を行い、精神科転院および精神科通院の必要性を判断しています。入院患者の不安・うつ・せん妄への対応も行っています。

### 【今後の展望】

出身医局でも医局員不足状態が続いており、当分の間は心療内科医が増員される見込みはないと考えております。診療においては、今後、がんによる死亡者数が2050年まで増加し続けることが推定されており、次第に緩和ケアにかかわる業務の比重が増加すると予想しています。いわき市内の精神科病院ならびに心療内科・精神科クリニックの先生方には、自殺企図後の患者と、うつ病および精神病圏の患者の診断と治療について御協力・御支援を宜しくお願い申し上げます。

〈心療内科医局員〉



診療科  
紹介

## 現在の心臓血管外科：FOR THE PATIENT

心臓血管外科

廣田 潤

## 【プロローグ】

私がこの地に赴任したのは平成5年4月のことでした。早いものでもう15年になります。当時、心臓血管外科が数年間のブランクがあったこともあり、末期の心血管外科手術を必要とする患者が山積していました。来る日も来る日も、雨が降っても雪が降っても週末も、年末も、自分の子供が生まれても、緊急、準緊急扱いの手術患者に追いまくられて日々が暮れて行きました。必然的に日常の定期手術の合間に緊急心大血管が入ることが多く、空いている時間の夜間やウイークエンドに手術を行うことになります。また、何故か週末や連休前、学会の時、年末年始に心血管系緊急手術が多いのです。時に末期の閉塞性動脈硬化症や心原性血栓塞栓症の患者が3例、4例と続き、気がつくとも夜が白々と明け始めていることが良くあったことを思い出します。15年前に東京女子医大循環器外科医局からチーム派遣が開始され、私も当時の上司とこの地に参りました。大変だった開設当初の数年間、岩手医大の若手心臓外科医も派遣されて共に手術に携わって頂いたことも記憶に留めねばなりません。この間、常時4人程度の心臓血管外科医で年間250例前後の手術を行っておりました。このうち必ず毎年3割前後が緊急手術でした。周知の如くここ数年来、厚生労働省の新しい研修医制度のあおりを受けて女子医大の体力も低下しました。医療事情が過酷な地方への派遣を希望しない若手医師が増加した結果、右へ習えで3年前から東京女子医大からの医師派遣は打ち切られました。開設からこの間まで、多くの心臓血管外科医の献身的な医療で維持されてきたこの領域ですが、医療に打ち込むあまり離婚してしまったり、腎不全となって慢性透析になった若手医師、心身の過労から突然自主休職するもの、腰部ヘルニアの手術を受けて肉体の限界を悟り職替えをしたり、燃え尽きて行く医師等、世間の目に触れないところで様々な人間模様が実は存在しておりました。今までの医師各個人の努力と崇高な理想心で維持されていた過酷な心臓血管外科を含む医療の現実に疑問符を付けたのが新研修医制度のように思えます。

3年前に私1人体制となりました。いわき市の人口35万人、周辺を含めた夜間医療人口50万人とも言われるこの浜通り地域の南部に心臓血管外科専門医が一人であるといういびつな環境です。地域医療の政策や病院運営管理の無策、専門医を雇用するという医療界の認識不足を批判したり嘆くのは容易ですが、心臓血管外科が存在しない限りこの街の循環器医療が成り立たなくなり、多くの救急医療を含む循環器患者の治療がこの地域で行えなくなる現実。結果、医療崩壊が一気に進む危惧を想像頂ければ、私が一人体制で周囲の協力を扇ぎながらも続けてきた理由が少し理解して頂けることと思います。基本的に心臓血管外科は循環器医療の一手段なのです。また、15年前に医療のブランク後の重症化した患者さんを当地で診た経験から、決し

しゃいましたらご相談下さい。

### 【低侵襲大動脈治療センター構想】

今後益々医療が進歩すると思われる動脈の低侵襲治療分野。大きな開胸手術や開腹手術を行わず、患者さんへの治療負担を最小にして最大の効果を得るのがメリットです。現在当院循環器科では冠動脈カテーテル治療はもとより、閉塞性動脈硬化症に対するステント治療を腸骨動脈領域からさらに下肢末梢側へ拡大し、大腿動脈のステントによる治療を既に成功させ確立しています。かくなる先進の循環器医療に歩調を合わせ、循環器医療の一環として共に低侵襲大動脈治療センターを立ち上げる構想を近藤医師とよく話し合っています。この地域に国内最先端の心血管医療を提供するのが大きな目標=FOR THE PATIENTです。いかに良質の医療を提供できるかを常に考えています。地域の皆様にとってこの構想はいかがでしょうか？御意見や御希望がありましたら連携室の方へ御連絡下さい。共に新しいものを作り出せたら本望です。

### 【診療業務】

手術は火、木、金の3日です。火曜日と木曜日が人工心肺を使用する心臓と胸部大動脈疾患の手術日で、日常は終日手術を行っております。金曜日は午前中の手術枠で末梢血管の手術日です。この時間帯は直接の対応は難しい場合がありますのでご了承下さい。また、全ての症例は予め全身精査の上、循環器チームとの合同カンファランスで手術適応を決めておりますので、疾患や治療方針についてのご相談は循環器外来でも可能ですのでよろしくお願いいたします。

外来診療は月曜日と水曜日の午前中に行っています。患者さんの紹介は、なるべく予約患者さんが少ない曜日へ受診調整をさせていただきますので当院地域医療連携室へ御紹介いただければ幸いです。基本的に御紹介いただいた患者さんは手術後安定しましたら、紹介元の医院もしくは施設へ逆紹介させていただいております。

大動脈解離や腹部大動脈瘤破裂などの緊急手術は、院内の状況が物理的に可能でしたら誠意対応しております。しかし、日常手術時や、院内で他科の緊急手術が行われていて手術室対応が不可能な際には、多施設への紹介をお願いする場合がありますので御協力を御願ひする次第です。当院手術室の現状は御存知の如く年間3500例超の麻酔科管理手術を行っており、日常



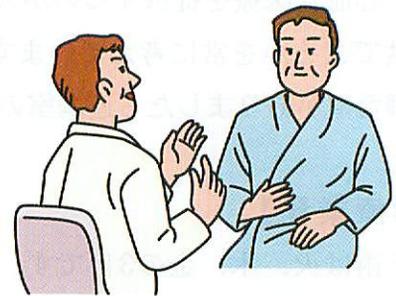
的に外科系全科の緊急手術が多いのです。かかる環境で緊急心臓大血管手術に関わる麻酔医、臨床工学技士、手術室ナースのスタンバイが物理的に困難な状況です。病院の機能を維持しながら、対応できる症例は受けていくというのが現在の当院の方針です。御理解の程よろしくお願いいたします。

て微力でも心臓血管外科を途切れさせてはならないというのも大きな動機です。

この3年間は、福島県立医大心臓血管外科医局の全面的協力を得て日常の定期手術を行うことができました。時にローテーション研修医の協力もあり、福島医大からの毎回の手術応援と当直応援を得ての日々です。この応援がなければ不可能な年月でした。この間、循環器医療の進歩と共に人工心肺を使用しない心拍動下冠動脈バイパス術を導入し、基本的に日常手術といたしました。この2年間は年間30例前後この手術を行っており、できる限り患者さんの肉体的負担を軽くすることに努めております。合併症を予め持っている多くの患者さんも、さらなる合併症を併発せずに良い状態で退院することが可能になりました。一方年間手術数としては、心臓大血管手術が50例程度、腹部大動脈例手術が20例程度、末梢動脈手術が20例程度、下肢静脈瘤手術が30例が一人体制でできる限界でした。

### 【現在の診療体制】

今年の7月から福島県立医大心臓血管外科医局からの人事で近藤俊一医師が新たに強力なメンバーとして加わりました。心臓血管外科医として今が旬の、バリバリの心臓血管外科医であります。これで、浜通りに心臓血管外科医が2名となりました。手術を行うことができる医師が2名になったことは、この地にとってどれほど福音であるかは想像に難くはありません。慢性的に疲弊し、ほぼ枯れ始めていた私も、大部激務が緩和されましたが、決して楽になることは無いのが臨床であり心臓血管外科医の悲しい性であります。とはいうものの、患者さんにとってより良い最新の手術を提供できるように、新たな展開を病院運営方と相談しながら推し進めています。その一つが、腹部大動脈瘤や胸部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術です。近藤医師を治療の中心に据え、病院当局にお願いして手術に必要なポータブルDSA撮影装置などの設備投資をしていただきました。既に腹部大動脈5例、胸部大動脈例1例の患者さんが年内にステントグラフト内挿術を受けられました（12月末の時点で）。これは、関連する循環器科、麻酔科、看護部、放射線部、臨床工学部、心臓カテーテル室、病院事業管理者を中心とした院内全体の包括的かつ全面的な協力があった結果であります。一気に国内でも最先端に行く施設へ仲間入りです。この病院にもこういう実力があるのだと、永年在籍する私も妙なところで感心する次第であります。 — 忙中閑話 —



大動脈瘤に対するステント内挿術は患者さんに対する侵襲度が飛躍的に軽減されます。適応さえ条件に合っていれば、術後成績や患者さんの社会復帰は良好に確保されます。超高齢であったり、合併症のため手術適応が無かった患者さんも助けることができます。腹部大動脈瘤の患者さんは半分以上が心臓、腎臓、脳等の全身合併症を有しており、ステントグラフトの適応があります。また大動脈瘤の形状により適応がない場合もありますが、今後さらに機材や技術は進歩して適応はより拡大するものと思われます。まずは、このような患者さんがいらっ

## 【2008年度の手術内訳】

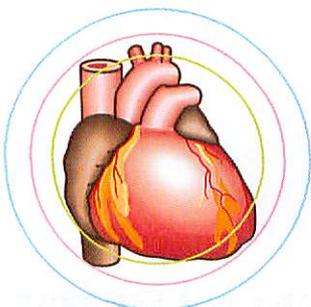
12月12日現在の手術数を紹介いたします。

手術総数172例で、心臓血管専門医認定手術は117例でした。人工心肺使用症例+心拍動下冠動脈バイパス手術は69例です。疾患別の手術内訳は弁膜症24例、虚血性心疾患32例、先天性1例、その他の心手術6例、解離性胸部大動脈5例、非解離性胸部大動脈8例、腹部大動脈瘤21例、末梢動脈19例、下肢静脈瘤35例、ペースメーカー2例、ICD5例、その他6例でした。

## 【お願い】

内科系諸先生方へのお願いであります。外来で腹部エコー検査を行った際に必ず腹部大動脈をルーチン検索に入れていただきたいのです。腹部大動脈瘤も小さなうちに治療ベースに乗せれば決して怖いものではありませんし、どのような治療も予定早期手術では予後良好です。破裂してからの緊急救命手術は世界的に予後不良です。また、寒くなる冬期の前後では高血圧が悪化しやすいので、急性解離性大動脈瘤や動脈瘤破裂の防止のため、血圧管理を再度見直して上げてください。

一般市民と通院中の皆様へ。高血圧治療中または、隠れ高血圧（早朝高血圧やコントロール不良）があると疑われる方は、上の収縮期血圧が130mmHg以下になるように、下の拡張期血圧が80mmHg以下となるように記憶して下さい。それが、救急救命センターと心臓血管外科の治療対象となる急性解離性大動脈瘤や腹部大動脈瘤破裂を防ぐ唯一の方法です。血圧が高い方は、今日にでもお近くの循環器系内科医の門を叩いてください。それと、人間ドックや消化器系受診の際、腹部エコー（超音波）検査をお受けになるとと思いますが、そのときには必ず腹部大動脈は大丈夫ですか？とお尋ねください。大動脈は普段は静かな臓器ですから無症状なのです。



〈心臓血管外科医局員〉  
（前列右）廣田潤医師 （前列左）近藤俊一医師

## 新任医師紹介



高梨芳崇 医師

**耳鼻咽喉科：高梨 芳崇 医師**

10月から、新しく赴任しました高梨芳崇です。一生懸命頑張ります。よろしく願いいたします。

**小児科：根本 照子 医師**

常磐病院より異動してきました小児科の根本照子です。

平成元年に岩手医大を卒業し、岩手県立中央病院より平成13年にいわき市に来ました。

7年ぶりの中核病院勤務は不安でしたが、スタッフの方々の温かい援助により、何とか1ヶ月勤めることができました。

まだまだ勉強不足、力不足ですが、精一杯がんばりますのでよろしくお願い致します。



根本照子 医師



伊藤 淳 医師

**泌尿器科：伊藤 淳 医師**

仙台市出身の泌尿器科、伊藤淳です。

雪が少なく、食べ物のおいしいいわきでの新生活を楽しみにしています。

よろしくお願い致します。



近藤俊一 医師

**心臓血管外科：近藤 俊一 医師**

7月から勤務することになった近藤俊一と申します。

どうぞよろしくお願い致します。

会津若松市出身の昭和40年生まれです。旭川医大、東北大学院卒です。

日本有数の心臓血管外科施設にできるようにがんばりたいと思います。



樋口光徳 医師

**呼吸器外科：樋口 光徳 医師**

10月よりお世話になっております。

これまでの経験を生かしながら、地域医療に貢献したいと思っております。

よろしくお願い致します。



平井浩気 医師

**形成外科：平井 浩気 医師**

7月より筑波大学附属病院からいわきへ赴任いたしました。

まだまだ勉強中ですが、頑張りますので、よろしくお願い致します。

地域医療連携室業務時間

月～金 8:30～17:15